




# 私が幼児教育を志した頃(19)

津守 真

## トームス家

一九五二年九月二十五日に私はトームス家へ引越した。

セントルイスバーグという富裕な人たちが住む地域である。トームス夫妻の子どもたちは皆成長して、孫が十人いる。隣に住む娘夫婦には子どもが三人いる。小学校五年生の女の子ジル、二年生の男児クリス、三歳の男児ボイドである。ワシントン旅行から帰った私は、早く進歩主義教育の歴史にとりかかりたくて気がせいでいた。し



かし子どもとも遊びたいし、授業のあいた時間にはアルバイトもせねばならないし、考えると忙しかった。そして何よりも、アメリカの学問がいかにこの社会と人間に深く根差しているかを知ったいま、今度日本に帰ったら、輸入学問ではなく、日本の社会の底から日本の子どもの問題を見つめて行きたいと、そのことがいつも頭を占めていた。

### クリスマス

私が学校から夕方七時頃帰ってくると、トームス家の食卓では温かい夕飯が待っていた。食事していると決まって扉をあけて首をのぞかせるのはクリスマスである。トームス家の長女夫妻は隣に近代的な家を建てて住んでいた。クリスマスは私がトームス家に引越すのを首を長くして待っていた。ひ弱な感じのする線の細い男の子である。人なつこくてうるさいほどに付きまとってくる。トームス夫人が、マコトは勉強で忙しいのだからそんなにうるさくしてはいけないとたしなめると、もう一分だけ、もう一分したら帰るからここにいていいでしょうと言って、私の部屋で積み木をしたり、本を読んだりチェスをしたりした。


日曜日にはトームス家では孫たち息子たちが一緒に食事をするようになっていた。



クリスとジルが食卓でいつも私の隣の席をとるのに競争で、ときに喧嘩が始まる。そうすると夫人はそんなにうるさくするとマコトは日本に帰ってしまいますよと言つてたしなめる。クリスはひまがあれば私をつかまえようと思つて一生懸命になつていた。それが分かるのでかわいかった。自分の家に客が来たときには、子どもたちが泊まりに来て大騒ぎだった。

トームス家には客が多かった。ある晩、トームス夫妻につられて、アフリカで働いていたミッシヨナリの話を聞きに教会に行つた。ヨハネスバーグの悲しい話だった。


ヨハネスバーグについてはトンプソン夫人から借りた『叫べ、愛する祖国よ (Cry, the Beloved Country)』という本を私は読んでいた。何代にもわたつて黒人の人種差別が行われていた国で、白人の若い夫婦が黒人から弾刻されて悩む話だった。私が付き合つていたアメリカ人たちの間では、ヨハネスバーグの人種差別を公然と認めて推進してきたオランダ改革派教への批判は強かった。アフリカから帰つたばかりのこの宣教師は、三十万人のアフリカ人がこの瞬間にも地下の鉱山で働いており、しかも金とダイヤモンドの利益の八十パーセントが三〇〇年間支配した白人に占有され、入口の八十パーセントを占めるアフリカの人には使われない政治の現状を熱涙をもつて語つた。ミネソタではこの時期、人種差別について居間で皆が語り合つていた。



## 夜のグレープジュース


毎晩十時少し前になると、トームス夫人が階段を半分くらい上ってきて、静かな控えめな声で「グレープジュースを飲みに下りてきませんか」と私を呼ぶ。私は中学生の頃から母に同じように声をかけられたことを思い出した。丁度本を読むのも飽きた時間なので私はいそいそと下に下りて行った。そしてあるときは食堂の椅子で、ある時はソファに腰掛けてグレープジュースとクッキーをつまむのである。そのときが一日で一番楽しいときだった。

トームス夫妻は七十歳に近い。トームス氏はケネディマヨネーズカンパニーという小さな会社を経営していた。いつも煙草をくわえて口のなかでもごもごも話をする。夫人は小さな静かな人で、心から他人のことを考える天使のような人だった。夫人はカナダ生れで、無口だけれども黙っているいろいろな人に親切をしている。病人があると聞くと、だれにも言わずに山のようにお見舞を抱えて勝手口から出て行くのを私は何度も見ていた。私にはトームス夫人は決して忘れることのできない天使である。社会関係や国際関係がどうであろうと、こういう温かい心は、国籍人種の壁を越えて私共の胸の奥にまで染みわたる。




『セーラムのピーボディ姉妹』——進歩主義教育前史——

ある晩、トームス夫人は私に興味があるのではないかと行って、二年前の一九五〇年に出版されたばかりの『セーラムのピーボディ姉妹 (The Peabody's sisters of Salem)』(Tharp, L. H. Little Brown and Co. 1950) を見せて下さった。ページをめくっているうちに、それが一八六〇年にアメリカで最初の幼稚園を創ったエリザベス・ピーボディと姉妹たちの伝記であることを知って私は驚いた。エリザベス・ピーボディの名前は以前に山下俊郎先生に見せて頂いたヴァンデウオーカー著『アメリカの教育における幼稚園』(一九〇八) で知っていたが、それがどういう人なのか詳しくは知らなかった。トームス夫人がどうしてこの本に興味をもったのか、私にはいまでも分からない。とにかく倉橋惣三の誘導保育の原点と私が考えていた米国の進歩主義教育の歴史を調べていた私には、この時期にこの本に出会ったのは幸いだった。自分の部屋に借りていつて早速読み始めた。



エリザベスの妹のメアリーは教育改革者として知られているホラス・マン夫人であり、もう一人の妹ソフィーは『緋文字』(スカーレットレター) で有名な文学者ナタニエル・ホーソン夫人である。エリザベス・ピーボディは若いとき学校の先生をしていたが、後にボストンのウエストストリートで本屋を開いた。ピーボディの本屋はさ



ながら当時の文化人たちのサロンで、才気ある女主人エリザベス・ビーボデイはその中心にいた。ホラス・マン、ナタニエル・ホーソンほか、思想家のラルフ・ウォルドー・エマソン、詩人ヘンリー・ソロー、作家で外交官のジョージ・リプレー、思想家で教育者のブロンズン・オルコットなど、顔触れは多彩だった。このオルコットの学校でエリザベスは教師をしていたのである。娘のルイズ・オルコットは若草物語の作者であり、南北戦争では従軍看護婦だった。いずれもコンコード学派の思想家で、一八六一年の南北戦争の時には奴隷解放を強く支持していた人たちである。エリザベスはわざわざリンカーンに会いにワシントンにまで行っている。エリザベスが幼稚園を始めたのが一八六〇年であるが、ここに集まった文化人たちが初期の幼稚園の普及のためにエリザベスを物心両面で支えたのだった。幼稚園はこの時代の文化運動であった。「このごろ、エリザベスは何か思い悩んでいる。若いときから本当にやりたいと思っていたことがけつきよく、この年齢になっても果たせなかったことを考えているようだ。いままでにやらなかったことで、自分自身にとっても友達にとっても、満足のゆくような何ごとかをやりたいと彼女は思っているらしい」と妹のメアリーは日記に記している。エリザベスはフレイベルの幼稚園に出会って人間教育に目を開かれ、その後四十年間にわたって幼稚園の普及に力を尽くした。



トームス家で夜遅くまで幾晩もかけて読んだ『セーラムのビーボディ姉妹』は文芸作品であるが、私がミネソタ大学図書館で調べていた二十世紀初頭の進歩主義教育論争の前史と言ってもよいものだった。ずっと後になって『セーラムのビーボディ姉妹』をもう一度見せていただきたいとトームス夫人に願ったところ、どこかにいつてしまつて見つからないとの返事だった。あのときから更に五十年を経て、幼児教育をたんに教育効果の狭い観点からではなく人間と文化の現象として見るとき、米国の進歩主義教育の歴史は教育の根本を示唆するものであり、現代の日本の教育問題にもつながるのであると思う。